

日本原子力産業協会 年次大会

世界の原子力は今!!

4月23～25日の3日間、東京都港区虎ノ門のニッショーホールを主会場に、日本原子力産業協会の『第46回年次大会』が開催されました。町連協からは山崎強青壮協副会長と柏田真一同事務局長が参加。3日間を通じて、福島の現状や世界の原子力事情などについて理解を深めました。

第46回 原産年次大会
THE 46th JAIF ANNUAL CONFERENCE



セッション3
パネル討論

渡辺 利剛 Toshitsuna Watanabe
ジェリー・トーマス Gerry Thomas
ボロディム・モスカレンコ Volodymyr Moskalenko
伊藤 仁 Hitoshi Ito
新妻 常正 Tsunemasa Niitsuma

セッション3
パネル討論

渡辺 利剛 Toshitsuna Watanabe
ジェリー・トーマス Gerry Thomas
ボロディム・モスカレンコ Volodymyr Moskalenko
伊藤 仁 Hitoshi Ito
新妻 常正 Tsunemasa Niitsuma

3日目はパネル討論も行われた

町連協から参加した2人も熱心に聴取

世界の中での日本の役割

初日は夕方からウエルカムレセプションが行われ、国内外からの参加者との交流の場が設けられました。講演会やパネル討論は、翌24日から2日間、日本を含む30カ国から、原子力の専門家や国際機関、政府関係者ら約800人が参加して行われ



約800人が参加した大会会場

UEAは世界有数の産油国ですが、2008年に原子力の平和利用に関する政策を発表し、以来原子

なぜ産油国が原子力発電計画を進めるのか

ここではアラブ首長国連邦(UAE)の取り組みについて講演された内容を紹介いたします。

「エネルギーミックスのあるべき姿を考える」というテーマで、長期展望に立ったエネルギー供給に関する講演が行われました。

東京電力福島第一原子力発電所の事故以来2回目の開催となる今回のテーマは『**原子力ゼロ? 世界がつける日本の責務**』。これまで原子力の平和利用を進めてきた日本が「事故の教訓を生かし、どのように世界に貢献できるか」、また「世界の国々は日本に何を期待しているか」などが発表されました。

2日目の午前中に行われた講演では、国内外の専門家から、日本のエネルギー政策や原子力政策のあり方について、建設的な指摘が相次ぎました。

放射線は身近なもの

力発電所の立地計画を進めています。これは、化石燃料が「自然環境問題」や「国情変化による安定供給の問題、コストの変動」など数多くの懸念材料を抱えており、



アラブ首長国原子力公社 (ENEC) 国際・広報担当理事 ファハド・アルカータニ氏

石油に依存し続けることはリスクが大きいと判断したからです。UAEは翌年に安全、保安、透明性について最も厳しい基準に沿った「原子力法」を公布。これに基づいて4基の原子力発電所の立地を決定しました。そして2012年7月、1号機のコンクリート打設が開始され、現在着々と原子力発電所立地に向けた工事が進んでいます。

これは必要なことですが、影響を過大に評価し、極端な除染の目標を立てることは現実的ではありません。科学的根拠に基づく評価基準を定め、早期に福島復興が実現するよう、現実的な対策を進めるべきだと考えます。

放射線を過大に怖がらない



インペリアルカレッジ・ロンドン 分子病理学 教授 ジェリー・トーマス氏

放射線は、医療利用のようによく見られる状況なら受け入れられます。一方、数値に現れにくい確率的な影響については、ゼロを目指すような極端な対応を取りがちです。我々はチェルノブイリ事故を経験しています。これをもとにした身体的な影響は、多くの事例調査によって科学的に検証されています。今では微小な放射線による健康被害より、過剰反応による心理的健康被害のほうが大きいこともわかっています。

福島の事故によって、世界中で原子力を否定する風潮が広がりました。しかし時間が経つと、多くの国で原子力への評価は事故前とほとんど変わっていないことがわかりました。これは、価格、信頼度、環境性において原子力が優れていることを改めて世界が認めた証拠だといえます。今、日本では福島周辺の除染作業が進んでいます。



世界原子力協会 (WNA) 理事長 アグネタ・リーシング氏

『JAIF 地域ネットワーク』意見交換会

重く響く、立地点の生の声

原産年次大会の期間中、町連協がメンバーになって『JAIF 地域ネットワーク』(左下記事参照)の意見交換会が行われました。参加者は北海道から鹿児島までのメンバー26名。町連協からは柏田真一氏が参加しました。

5組のグループに分かれたメンバーは、各グループごとに決めたテーマについて議論します。この内容を、最後にそれぞれが全体発表するという方法です。テーマは「マスクミの報道のあり方」「正しい情報の見極め方」「立地地域から消費地市民に伝えたいこと」などで、情報の取捨選択や地域間交流についての内容に議論が集中しました。



① 議論の内容を記録する柏田氏

② グループ討議の様子

グループ討議で感じたこと

【柏田真一】

私のグループでは、主にマスクミ報道について意見交換を行った。

震災以降、テレビや新聞では原子力について否定的な偏った報道が頻繁に見られる。これは参加者全員が感じているようで、「インタビュアーを受けて発言した内容をマスクミ側の都合で編集されるため、意図と違う内容になってしまふ」という意見が多かった。「事前に報道内容をチェックする必要があるのではないか」との意見も出た。正しい情報を選別するためには、我々もある程度の知識を身につけておく必要があると感じた。

放射線については、知識不足が誤解に結びついている。例えば昨年販売が禁止されたレバ刺しなどの生肉は、放射線で消毒すれば安全に食べられることがわかっている。うまく利用すれば食の安全につながるが、放射線というだけで拒否反応を起してしまう。医療では常識的に使われており、とても身近なものだということをマスクミはもう少し発信すべきであり、我々も積極的に啓発していきたいという意見が出た。

意見交換会の後に開催された懇親会では、被災して今も仮設住宅に住んでいる方や、原子力発電所の立地点で商売をされていた方にお話をうかがうことができた。こうした交流を通じ、私たちも福島に視察に行くべきだと感じた。

安全性を高めるための教訓に

上関町青壮協連絡協議会 副会長 山崎 強

東京電力福島第一の事故は残念な出来事だが、事故を起こしたからといって投げ出す(原子力をなくす)のはあまりに無責任。この事故をきちんと解明し、情報を世界で共有することによって、これから新規でつくる発電所をより安全に稼働させることができると思う。だからといって「絶対に事故は起きない」と考えるのではなく、「もしもの時の対策」を備えておくことが必要だと感じた。

講演会では、福島事故後、放射性物質について「科学的に統一した見解が出されないまま、マスクミの都合により色々な報道がされたことは反省すべき」との発言が印象的だった。



青壮協 取材を終えん

より現実的な選択を

上関町青壮協連絡協議会 事務局長 柏田 真一

最も印象に残ったのは、日本は「世界の常識から見ると、安全だとされる放射線基準値が低すぎる」という専門家の言葉。異常なほど低い目標値を設けることは、精神的にも経済的にも現実的ではないと感じた。「避難者に対し放射線影響を正しく示したうえで、希望者は帰ってもよい」という選択肢を与えるべき」という話は共感できた。

震災、事故からの復興は必要なこと。しかし、世論を意識し過ぎて現実的な課題から目をそらし、原子力発電所の再稼働を後回しにすべきではない。火力発電所の比率が高くなると、CO₂排出による気候への影響が懸念される。また、円安による海外からの燃料費高騰も深刻で、電気代の上昇は企業だけでなく家計にも打撃を与えてしまう。国や電力会社が正しい情報を国民に開示し、ていねいに説明すれば理解も得られるのではないかと感じた。

一般社団法人 日本原子力産業協会 とは

日本の原子力産業に係る企業、団体、自治体等、様々な業種の会員で構成される社団法人。2006年に改組される前の名称は『日本原子力産業会議』。以前は文部科学省所管の社団法人であったが、公益法人制度改革に伴い一般社団法人へ移行した。(略称は「原産協」または「JAIF」)

原産協の『JAIF 地域ネットワーク』は、原子力発電所立地点や計画地点などの各種団体、個人で構成されており、勉強会や意見交換会などを通じて原子力発電所やエネルギー、放射線などについて学ぶとともに、地域間の交流を深めることを目的としている。(6月3日現在、8グループと64名の個人が登録)

昨年11月、JAIF 地域ネットワークの担当者が来町し、主旨、目的などの説明を受けた後にメンバーに。今回の原産年次大会と、期間内に行われた交流会から参加した。立地点の生の声を聞く機会として、今後も積極的に参加していく予定。



③ 町内を視察する『JAIF 地域ネットワーク』担当の坂上千春さん

●震災からの復興は徐々に進み、日本経済も「アベノミクス」効果で高揚の兆しを見せています。しかし、上関町にとっては、まだまだ厳しい状況が続いています。●そんな中、縁あって今年から『JAIF 地域ネットワーク』メンバーに加えていただきました。初めて出席した今回の意見交換会には、町連協から青壮協メンバーの2名が参加。貴重な体験ができたと思います。●こうしたイベントへの参加は、知識や見聞を深める良い機会です。これからも積極的に参加したいと考えています(K)

後記